

矢部 隆センター長はじめ、市民協働推進員の指導のもと、センターとその横を流れる植田川で体験学習をするため、名古屋市教育委員会エコ・フレンドシップ事業「環境未来探検隊 Team Gaia」の皆さんが、「なごや生物多様性センター」に来てくれました。

なお、今回の事業は「なごや環境大学※」にコーディネートいただきました。

※「なごや環境大学」：市民/市民団体・企業・大学・行政が協働でつくる「環境学習のネットワーク」。
事務局は地下鉄伏見駅から徒歩8分の伏見ライフプラザ13階「エコバルなごや」内。

次代の生物多様性を担うお子さんたちの様子について、市教育委員会の藤井昌也先生からのご寄稿です。

なごや環境大学Webサイト
<http://www.n-kd.jp/>

目を輝かせ生き物の説明に聞き入る子どもたち

8月25日(土)、太陽の日差しがガラガラと照りつける中、小学校5年生から中学校2年生の隊員20人は、植田川に入り、前日から取り付けておいたカメを捕らえる仕掛けを引き揚げたり、一人ひとりタモ網で魚や水中生物を捕まえたりしました。仕掛けの中には2匹もカメがかかっていたものもあり、子どもたちの中から「おおーっ」という歓声があがりました。タモ網を水中で構え、魚がいそうな場所の水辺の草をガサガサと足で探り、追い込んで魚などを捕まえるのはなかなか難しかったのですが、何度も繰り返すことでほとんどの子どもが何匹かの魚などを捕まえることができました。タモ網を揚げて、その中に魚が入っていたときの子どもの嬉しそうな笑顔はとびっきりで、とても素敵でした。

カメは「クサガメ」8匹、「ニホンズツボン」1匹、「ミシシippアカミミガメ(通称ミドリガメ)」1匹の計10匹、魚はタモロコやオイカワ(シラハエ)などの5種類を全部で数十匹、加えてヌマエビの仲間と、多くの生きものを捕まえることができました。

午後からは、生物多様性センターの方々から、捕まえた生きものについての詳しい説明や名古屋の川の現状、外来生物の種類や実態などの話を聞きました。人間・生きものにとって川はどんなところであるのが望ましいのか、現状として、川では排泄物の対応や海水が逆流していること、汚水・雨水の合流式の下水道が多いこと、開発で保水力が失われていることなどの学習をし、理想とする川辺のイメージを話し合いました。

外来生物(※)の話では、アライグマ、ワニガメ、オオクチバス(ブラックバス)、コイなど、数も種類も多くの外来生物が名古屋にも生息しており、生態系に影響を与えることを学習しました。子どもたちは、目を輝かせ、自分たちで捕まえた生物を見ながら、それぞれの特徴などの説明を聞いていました。また、慣れ親しんでいる身近な生物の中にも外来生物が多くいることを知り、とても驚いていました。

子どもたちにとって、初めて知ったことや興味深いことなどがたくさんあったとても有意義な時間でした。

(名古屋市教育委員会 指導室 指導主事 藤井 昌也)

！ 外来生物(※)

もともとその地域にいなかったのに、外国などから人間によって持ち込まれた生きものを指します。そのうち、日本国内の別の地域から持ち込まれたものは「国内移入種」と言います。

多くは、ペットや観賞用、釣り、食用などの目的で持ち込まれたり、貨物や船などに付着して気付かないうちに運ばれてしまったものです。

外来生物が引き起こす悪影響

- もともとその地域にいる在来生物を食べる
- 在来生物の生育環境を奪ったり、餌の奪い合いをする
- 近縁の在来生物と交雑して雑種をつくる
- 人に危害を加えたり、農作物を荒らす

外来生物の被害を予防するために

入れない!
悪い影響を及ぼすかもしれない外来生物を入れない

捨てない!
飼っている外来生物を野外に捨てない

掘げない!
野外にいる外来生物を他の地域に掘げない

滝ノ水緑地の里山と湿地を育てる会

滝ノ水緑地は緑区の住宅地にあり、4haほどの雑木林の中に小さなため池と湿地があります。

保全活動は、1997年に、緑地の木を伐って炭焼きをしたことから始まりました。当初から、地域住民(滝ノ水学区)や地元小学校との関わりがあります。

毎年、近隣の二つの小学校で、滝ノ水緑地を素材にした総合学習がおこなわれ、学校からの要請を受けて、緑地や学校に出向きます。100人以上の子供たちを前にお話をしたり、5～6人のグループに分かれて緑地を案内したり、保全作業をすることもあります。子供たちや担任の先生方は毎年変わるので、授業の視点やアプローチの変化にも対応しています。

熟年代中心の小さなボランティア団体は、知識も人数も十分でないため、全てに満足するような対応はできませんが、子供たちに緑地のお話をすると、目を輝かせて次々に質問の手が挙がったり、最初は木々に触れるのも尻込みしていた子供たちが、やがて頬を上気させて楽しそうに落ち葉プールの上で飛び跳ねる姿を見ると、この活動の大切さが実感されます。

子供たちと自然の生き物たちとの距離は、ますます遠くなっています。子供たちに身近な自然を体験させる教育に、より広くて厚い支援と理解をいただきたいものです。

生物多様性に向けての取組事例をお寄せください。このニュースで紹介していきます。(すべて掲載できない場合もありますので、ご了承ください)

掲 示 板

名古屋版のレッドリスト・レッドデータブックの改訂作業に着手

名古屋市では、動植物の生息・生育状況を調査し、絶滅の恐れのある野生生物をまとめた「レッドリスト」を作成しています。また広く市民の皆さんにお知らせするため、これらの動植物の生息・生育の状況や減少の要因などを解説した「レッドデータブック」を作成しています。

最初のレッドデータブックを発行して8年以上が経過したため、今年度から概ね3か年をかけて、調査・改訂します。作業は各分野の専門家による検討会を設置して行っています。

改訂の目的

名古屋市内で特に保護が必要な動植物種について、生息・生育状況の変化や新たな科学的知見を反映します。

また、調査を通して得られた市内の動植物の生息・生育情報や資料などを、なごや生物多様性センターに蓄積していきます。

■「動植物実態調査検討会」委員の皆さん (敬称略)

専門分野	氏 名	所 属
植 物	菅沢 俊介	愛知教育大学教育学部特別教授
	鳥居 ちあ子	愛知県植物誌調査会会員
	コケ植物	成田 務
哺乳類	野呂 達哉	新城市鳳来寺自然科学博物館学術委員
	鳥類	小笠原 昭夫
動 物	なごや生物多様性センター-市民協働推進員	金城学院大学非常勤講師
	なごや生物多様性センター-長	愛知学泉大学現代マネジメント学部教授
	両生類	藤谷 武史
	魚類	谷口 義則
	昆虫類	田中 多喜彦
	クモ類	須賀 瑛文
	カニ類	天野 勲
	貝類	川瀬 基弘

■経緯

平成14年11月	名古屋版レッドリストの公表
平成16年3月	「レッドデータブックなごや2004 動物編・植物編」の発行
平成22年3月	改訂版「名古屋版レッドリスト2010」の公表
平成22年10月	「レッドデータブックなごや2010～2004年版補遺～」の発行

問い合わせ・申し込み先

- 住所: 名古屋市天白区元八事五丁目230番地
(地下鉄塩釜口2番または3番出口から徒歩5分)
- 電話: 052-831-8104 ●FAX: 052-839-1695
- E-mail: bdnagoya@kankyokyoku.city.nagoya.lg.jp
- なごや生物多様性センターウェブサイト
<http://www.kankyo-net.city.nagoya.jp/biodiversity/>
- 名古屋市公式ウェブサイト
<http://www.city.nagoya.jp> [生物多様性センター](#) [検索](#)
- 関連ウェブサイト
なごや生物多様性保全活動協議会 <http://www.bdnagoya.jp>

なごや生物多様性センターでは、市民協働で調査・保全活動を進めるため、「市民生きもの調査員」を募集しています。詳しくはウェブで。



この広報紙は古紙パルプを含む再生紙を使用しています。

生きもの シンフォニー

発行

名古屋市環境局
なごや生物多様性
センター

5号

平成24年11月

きれいな花を咲かせる外来スイレン ～生育環境を脅かされる在来植物～

平成23年～24年に行った調査の結果、市内24か所で外来スイレンが確認されました。この中にはガガバタやジュンサイ、イヌタヌキモなどの希少な水生植物が生育しているため池もありました。



ガガバタ ジュンサイ イヌタヌキモ

どんな対策をしているの？

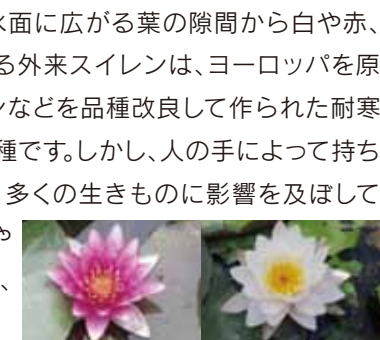
ため池に持ち込まれた外来スイレンは、春にいち早く発芽して生長するため、水面全体を覆い尽くすほどに繁茂しているため池もあります。その結果、水中で光合成をする多くの水生植物が生育を阻害され、水生生物の生息しづらい貧酸素状態となってしまう。

そこで、平成24年9月、ため池の生物多様性を保全することを目的に、なごや生物多様性保全活動協議会と協働し、塚ノ杵池(名東区)で外来スイレンを取り除きました。

協議会会員や市民調査員など約40名が2時間かけ、ごみ袋に35袋(約1,700リットル)の外來スイレンを池から取り除きました。しかし、今回の対策で取り除いた外来スイレンは、池全体から見ると一部でしかなく、野外で一度増えてしまった外来生物を駆除することはとても困難です。しかし、諦めることなく今後も外来生物防除を続け、生物多様性の保全に繋がっていかねばならないと考えています。

市民の 皆さまへの お願い

外来生物の対策を行うには、早期発見・早期対策がもつとも有効な方法です。外来スイレン等の防除計画を立てる上での参考として活用するため、皆さまの身近な所(ため池や公園、河川など)で外来スイレンを見かけられましたら、情報(調査者氏名、調査日、調査場所)と生育の様子が分かる写真を、なごや生物多様性センターまでお寄せください。



外来スイレンの花



ため池に繁茂する外来スイレン



外来スイレンの取り除き



(市民協働推進員 中村 肇)

自然豊かな名古屋 41種の陸貝を発見

速報データまとまる
～「なごやで探そう!カタツムリ」調査から見えたこと～

名古屋市からこんなに沢山!

一斉調査による名古屋市内33地点から発見された陸貝は41種5,957個体で、都市化の進んだ市内でも豊かな自然が残されていることがわかりました。最も種数が多かったのは相生山緑地と高座結御子神社の19種(各調査地点平均9.6種)です。陸貝の多様性(多様度指数)が最大であったのは東山公園の3.06(各調査地点平均1.92)です。最も多くの地点で確認されたのはオカチョウジガイ(29地点)、次いでイセノナミマイマイ(24地点)です。

ヨーロッパやアメリカなど外来種も続々!

外来種は、チャコウラナメクジ(ヨーロッパ原産)、コハクガイ(北アメリカ原産)、トクサオカチョウジガイ(東南アジア原産)、アズキガイ(国内移入種)、ウスイロオカチグサガイ(同)など9種でした。外来種が多いのは都市型生態系の特徴であり、既に分布を広げたこれらを取り除くのは困難ですが、更なる分布拡大を最小限にとどめ共存も考えなければならないでしょう。

貴重なデータがどんどんと増加!

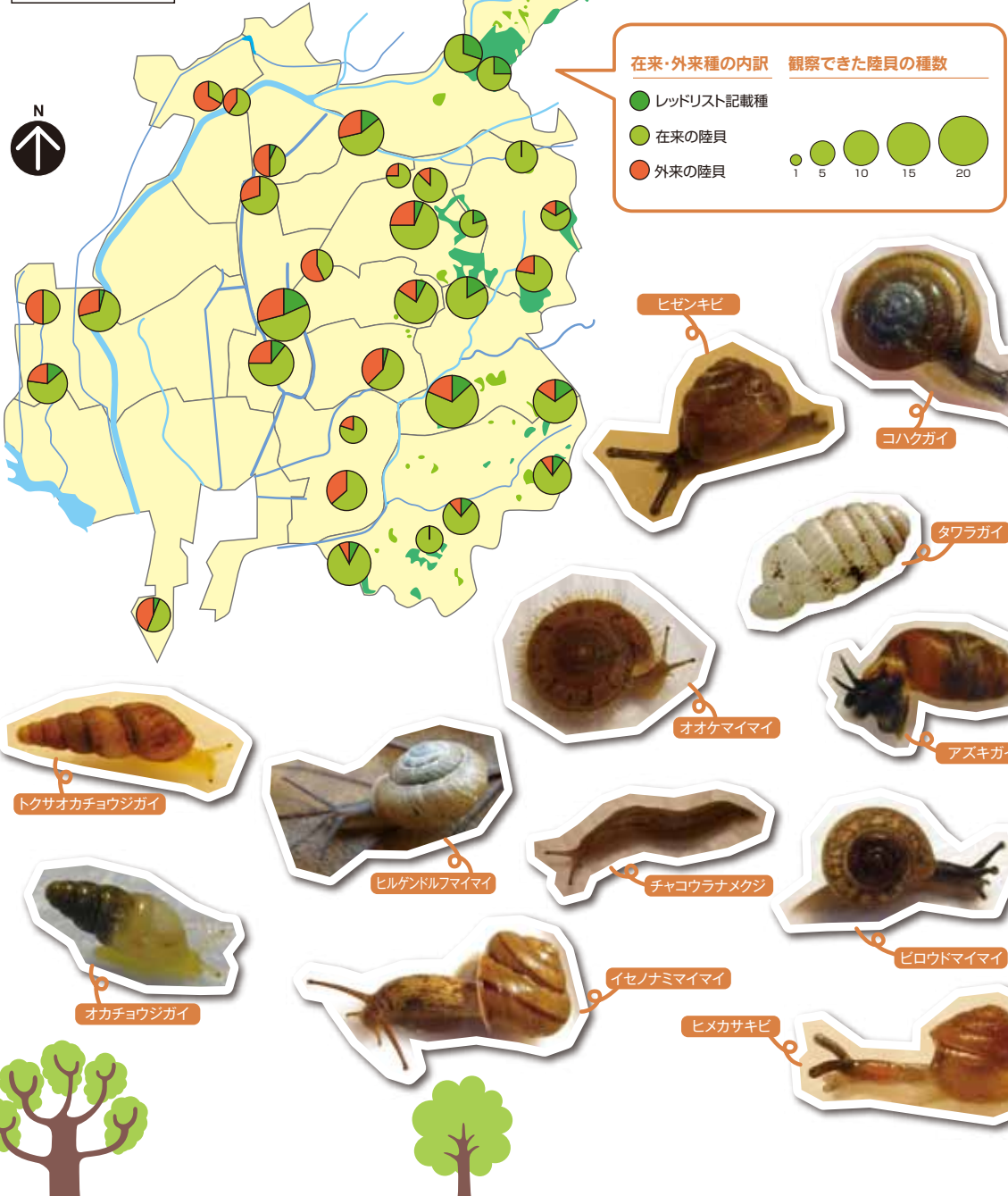
絶滅危惧種のヒルゲンドルフマイマイ、準絶滅危惧種のヒメカサキビとヒゼンキビなど、レッドリスト記載種6種、市内初記録としてタワラガイなど4種が、発見されました。また、市内では滅多に見られない山地性種のミジンヤマタニシが明徳公園で発見されました。名古屋城外堀はオオケマイマイが多産する最後の楽園であることもわかりました。

陸貝は生物多様性の“ものさし”

今回、調査参加者から「身近に1cmにも満たない微小な陸貝が沢山いて種類の多さに驚いた」という感想が多く寄せられました。陸貝は陸上の様々な環境に適応しています。自然度の高いところにしか生息しない種、乾燥に強い種、市街地を好む種など、このような指標性から調査地の環境や自然度を診断することができます。陸貝はとても身近な親しみやすい生きものです。また、子供から大人まで誰でも気軽に探せます。そして今後も新しい発見が期待できます。これからも陸貝調査にご協力願います。

(愛知みずほ大学人間科学部講師 川瀬 基弘)

調査結果MAP



数も種類も 名古屋にはカタツムリがいっぱい

10月6日(土)～8日(月・祝)の3日間、名古屋市内の33カ所で、「なごや生きもの一斉調査・2012陸貝編 ～なごやで探そう!カタツムリ～」を「なごや生物多様性保全活動協議会」との協働で行いました。

この調査は、カタツムリ・ナメクジといった陸貝の数や種類がどのくらいいるのかを記録するもの。身近な存在といえる陸貝について調べることで、多くの人に身近な自然の現状について関心を持ってもらいたいという目的で実施しました。

調査には、「なごや東山の森づくりの会」をはじめ、日頃それぞれのフィールドで活躍している19団体が協力。事前研修を受けたリーダーを中心に465人の市民が参加しました。

結果(速報値)は、41種もの陸貝を発見。そこから何が分かったのか、調査の指導や同定に尽力した愛知みずほ大学人間科学部講師で陸貝研究に取り組む川瀬基弘さんにまとめていただきました。

調査結果はさらに精査をし、平成25年2月上旬に開催予定の「活動報告会」でお知らせします。

10月6日の名古屋城外堀会場には、国際日本文化研究センター客員教員(准教授)共同研究員で昆虫の考古学を研究されている森勇一さんも参加。市民の皆さんと一緒に陸貝を探しました。



森 勇一さん

「洗濯ネットなど、身近なものを調査道具としてうまく使っていますね。陸貝だけではなく、ダンゴムシなども選り分けることができるので、総合的な生物調査も可能ではないかと感じました」

活動展示 & 夏休み生物多様性講座を開催

8月25日(土)、26日(日)の両日、「活動展示 & 夏休み生物多様性講座」を実施しました。会場には、親子連れを中心に多くの市民の方が訪れ、生体(実物)やパネル展示を見たり、生きものに関する講演を聴いたり、楽しく生物多様性の世界にふれました。2つの講座の様子を紹介します。

身近な葉っぱの観察から 生物多様性の世界へ

クスノキの葉っぱの脈と脈の間にある小さなふくらみに穴を開け、顕微鏡やルーペで中をのぞいてみると…小さなダニが動いているのが分かります。これは「ダニ室」と呼ばれる器官。名古屋大学博物館でダニ室の研究をする西田さんは「花をダニから守るために、葉っぱに仕掛けられたわなではないか」との自説を披露してくれました。肉眼では見えない小さな世界に息づく生物の不思議に、参加者から驚きの声が上がりました。

講師:西田 佐知子さん(名古屋大学博物館准教授)

なごやの陸貝から見える 生物多様性

カタツムリは、「陸にすむ貝の仲間」。「殻をとったらナメクジになる」というのは間違いで「寿命はおよそ2～3年」…。クイズ形式でカタツムリをはじめとする陸貝のことを分かりやすく説明してくれました。

講師:川瀬 基弘さん(愛知みずほ大学人間科学部講師)

第1回 なごや生物多様性セミナー ～カスミサンショウウオの保全へ向けて～

日時:2012年9月11日 18:30～21:10
場所:なごや生物多様性センター 2階会議室

生物多様性について話し合う「場」

なごや生物多様性センターでは、9月11日に第1回なごや生物多様性セミナーを開催しました。このセミナーは、名古屋に残された自然と生物多様性を保全するために、保全に関わる市民、研究者、行政が一堂に会し、保全のための問題点や対策などを話し合う「場」として、なごや生物多様性センターが企画したものです。第1回は「カスミサンショウウオの保全へ向けて」というタイトルで、これまで、希少種カスミサンショウウオの保全に関わってきた4人の演者に話をしていただき、その後、約40名の参加者による総合討論を行ないました。

カスミサンショウウオは国のレッドリストで絶滅危惧Ⅱ類、愛知県のレッドリストで絶滅危惧ⅠB類、名古屋市のレッドリストで絶滅危惧ⅠA類に指定されています。隠適的な生活をしているため、多くの場所で人知れず姿を消してしまった生きもののひとつです。市内では、2012年の現在まで何とか生き延びていますが、危機的な状況は今も続いており、現場で保全活動をしている方々からも早急の対策が求められていました。

カスミサンショウウオを守るため

今回のセミナーでは、最初に東山動物園の両生類飼育担当で「尾張サンショウウオ研究会」の代表でもある藤谷武史さんに、カスミサンショウウオの生態や名古屋とその周辺に生息するカスミサンショウウオの現状、遺伝的多様性などについて話していただきました。かつてはカスミサンショウウオが住んでいた場所も開発によって多くが消失してしまった一方、市内では、緑地公園内にカスミサンショウウオの生息場所がわずかだが残されてきたこと、カスミサンショウウオの産卵にとって雨量が非常に重要な要因であることなどの話がありました。

続いて、「水源の森と八竜湿地を守る会」代表の柴田美子さんから、現場では、年々、産卵数が減少していること、外来種であるアライグマやアメリカザリガニによる捕食の可能性や、産卵場所である湿地の水枯れの問題などについて話していただきました。「大高緑地こども自然観察会」代表の棚川菊蔵さんには、田んぼを再生させる活動の中で作った水路にカスミサンショウウオが産卵するようになったことから、そのような人間の活動もまたカスミサンショウウオを保全する上で非常に重要であるといった話をいただきました。

最後に、名古屋大学大学院環境学研究科教授の夏原由博先生から、保全生物学という新しい学問領域の観点でカスミサンショウウオの保全について話していただきました。希少種の場合、いくつかの地理的スケールに分けて保護を考える必要があるが、名古屋の場合は小さいスケールの地域しか残っていない

ので、その小さなスケールの中に、カスミサンショウウオが生き残れるような場所をどのように作っていくのかが中心的な課題となることでした。また、個体群存続可能性分析による滋賀県での研究事例から、カスミサンショウウオの絶滅の確率は、幼生の生存率の変化よりもむしろ成体の生存率の変化の方に大きく影響されるなどの話がありました。カスミサンショウウオの保全では、発見しやすい卵のうや幼生をいかに守っていくかということが課題となりますが、実は成体の生存率をあげるような方策も重要であることが理解できます。

市民・研究者・行政の協力が不可欠

最後に、出席者全員でカスミサンショウウオの保全に関わる問題点や今後の課題について総合討論を行ないました。市内のカスミサンショウウオ減少の要因として、水枯れや外来種の問題はあるものの、生息場所の完全な消失以外、これといった特定の原因をあげることが難しいようでした。さらに、カスミサンショウウオの生態や行動自体に不明な点が多いことも、保全対策を難しくしている原因との指摘がありました。そのため今後、生態や生息環境の調査、モニタリングが不可欠であることが共通の意見でした。

その他、比較的攪乱されやすい動的環境で生きてきたカスミサンショウウオを公園利用者のために維持管理している緑地で保全することの難しさや、ペットとして捕獲されてしまうことのあるカスミサンショウウオの保全活動を社会に公表する時の問題点など、討論の内容は多岐に渡りました。

今回のセミナーでは、確定的な結論を導き出すことはできませんでしたが、しかしながら現場の地道な活動とともに、保全のためのランドデザインもまた非常に重要であるということがあらためて認識されました。そのためには、現場で保全活動を行なっている市民や研究者だけではなく、生息場所の管理や法整備等に関わる行政の理解や協力も不可欠です。

さらなる保全対策を進めるために

今後、さらに具体的な保全対策を進めるためには、湿地の水量変化や陸上環境の調査、外来種であるアメリカザリガニなどの防除対策などが必要となります。また、生息場所である湿地や周辺の樹林地の保全や新たな生息場所の創出、危機的状況に陥った時の移入先など、市内全体としての保全方針を作らなければなりません。次回以降のセミナーでは、具体的な対策や方針作りに向けて、さらなる協力体制を整えていきたいと考えています。

(市民協働推進員・金城学院大学講師 野呂 達哉)